

4.3 ヒアリ対策に使用するもの


4.3.1 アリ採集道具

ヒアリが発見されサンプルとして採集する場合は、刺されないようにあらかじめ殺虫して採集するか、素手で触らないような方法で安全に採集する必要がある。採集したアリは、アルコール等(あれば粘性の高いプロピレングリコールやエタノールが良い。なければ消毒液や無色の酒類などで代用が可能)で保存するのが望ましい。

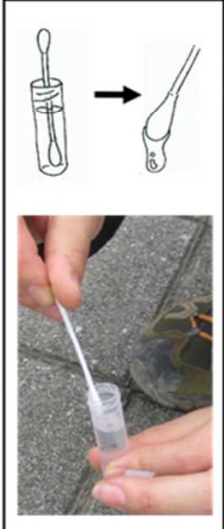
アリ採集キット

<内容物>

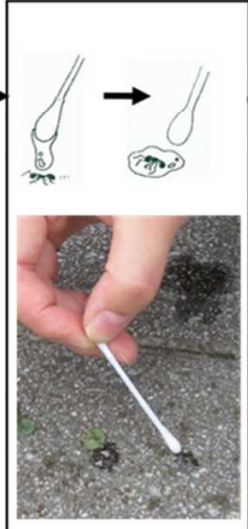
- ・粘性アルコール入バイヤル
- ・綿棒
- ・送付先宛名



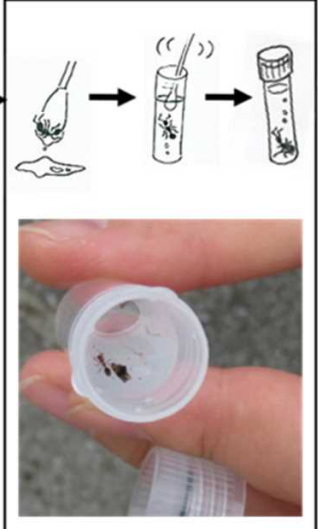
①綿棒に溶液を たっぶり含ませる



②アリの上に溶液を 落とし、動かなくする



③綿棒でアリをすくい 取り容器に入れる



4.3.2 殺虫剤

殺虫成分としては、即効性のもの(合成ピレスロイド系薬剤など)と遅効性のもの(フィプロニルなど)がある。使用方法や注意事項などの詳細は各商品の取り扱い説明書に従うこと。また、魚毒性がある殺虫剤の場合は、水域に流入しないなどの周囲の環境への配慮も必要。

①エアゾール型殺虫剤(スプレー式:即効性)



【用途】すぐにアリの動きを止めたい・緊急で殺虫したい場合、目に見える範囲に少数しかいない場合に使用する。

【成分】ピレスロイド系

【使用】アリに直接ふきかける。

【注意】吹き飛ばさないように注意。狭い場所で噴霧する場合、十分な換気をし、火気の近くでの使用を避けるなど、当該商品の使用上の注意に留意する。

②液体型殺虫剤(液剤:即効性)



【用途】すぐにアリの動きを止めたいがエアゾール式が使えない場合や、障害物の下など狭い場所にいる場合に使用する。

【成分】ピレスロイド系

【使用】アリの集団や行列に直接かける。

【注意】大量に散布する場合は、専門のペストコントロール業者に高圧噴霧器で散布してもらう方法が効率的。巣への使用は、下記遅効性のものと同様に注意が必要。

③液体型殺虫剤(液剤:遅効性)



【用途】生息域がごく狭い場合や、巣ごと殺虫したい場合に使用する。アリ同士で互いに体を舐め合う習性(グルーミング)を利用して他のアリに次々と殺虫成分を伝え、巣内の個体を効率的に防除することができる。

【成分】ネオニコチノイド系/フィプロニル系

【使用】実際のヒアリの巣は、深さ・広がりともに地上部のアリ塚よりもずっと大きいため、巣に使用する場合、表面のみでの使用だと有翅女王が逃げたり、巣ごと別の場所に引っ越したりして逆効果になることもある。ヒアリの逃亡を想定した設置型殺虫剤の併用や処理後モニタリングなどの対策が必要である。

④遅効性設置型殺虫剤(餌剤:遅効性)



【用途】 ヒアリが確認された場合、確認地点及びその周囲に設置する。アリが餌として巣に持ち帰って幼虫や他のアリに分け与えるので、連鎖的に殺虫効果が得られる。巣の奥に潜む個体にまで薬剤が浸透し、アリを巣ごと駆除する効果が期待できる。

【成分】 フィプロニル系/アミジノヒドラゾン系

【使用】 ヒアリが発見された場所の地面等に置く

【注意】 ヒアリがまだいない場所で予防的措置として使用しても効果はなく、むしろ在来のアリ等を駆除してしまうことでヒアリが侵入した際にその定着を容易にするリスクがある。公共施設等一般の利用者がある施設で使用する際には、乳幼児やペット等の誤食予防対策が必要。

⑤くん蒸剤



【用途】 ヒアリが荷物の隙間やコンテナ内に多数潜んでいる可能性が高い場合に使用する。薬剤を煙や霧状にすることにより一定の空間に行き渡らせ、殺虫する。

【成分】 オキサジアゾール系/ピレスロイド系

【使用】 閉鎖空間内で始動させる。必要があればコンテナ等を目張りする。燻蒸の方法や燻蒸時間等は使用する製品の説明書に従う。

【注意】 1回の燻蒸で全てのアリを殺虫しきれていない場合もあるので、燻蒸が終わったら生き残りがいないかを確認する。専門業者によるくん蒸の方がより日数や費用を要するが効果は高い。

⑥ワンプッシュ式殺虫剤(即効性)



【用途】 姿は見えないがヒアリがいるかもしれない場合に使用する。例えば、県内のコンテナでヒアリが発見された場合、その当該コンテナ以外の空コンテナ内にも念のため殺虫処理を施したい場合などで使用。噴霧するだけでコンテナ内に殺虫成分が行きわたり、見えない場所に潜んでいるヒアリが外へ流出するのを防ぐ。

【成分】 フルトリン

【使用】 コンテナ内に噴霧、すぐに扉を閉める。

【注意】 燻蒸に比べ薬剤の浸透能力や殺虫効果は低いいため、ヒアリが本当に見つかったコンテナの殺虫処理にはくん蒸処理を行う。ワンプッシュは、あくまで予防対策として使用する。

4.4 対象別普及戦略

ヒアリ等を効果的に予防・防除するためには、行政や事業者による監視防除体制を維持しつつ、長期に渡って県民のなかにヒアリ等を監視していく目を増やしていくことが重要である。そのために実施する普及啓発活動は、対象を分けて目的を設定し(行政機関、特別の被害が予想される対象者、および一般市民)、各対象に合った内容の戦略を用いる必要がある。詳細は資料4参照。

| | 対象 | | |
|----|----------------------------|-------------------------|--|
| | 行政 | 特に被害が予想される対象 | 一般 |
| 目的 | ヒアリ類の一次スクリーニングを担えるようになるため。 | ヒアリ類がもたらす人への被害を軽減するため。 | ヒアリ類による沖縄の生態系への被害に対する理解を深めるため。市民参加型の監視体制を確立するため。 |
| 戦略 | ①定期的な同定研修の実施 | ②対象別ポスターの作成 ③講演会での講演 | ④メディア(TV、新聞等) ⑤ワークショップの実施 |

4.5 ヒアリに刺された場合

4.5.1 ヒアリ毒と症状

ヒアリの毒には、アルカロイド毒であるソレノプシンの他に、ハチ毒との共通成分であるホスホリパーゼやヒアルロニダーゼなどのタンパク質が含まれる。刺された後の症状は場合によって異なる。

【軽度】刺された瞬間は熱いと感じるような痛みを感じ(痛みはすぐに引く)、やがて刺された痕が痒くなる。時間がたつと刺された箇所は水疱ができ、その後膿が出ることもある。

【中度】刺された部分を中心に腫れが広がり、部分的または全身にかゆみを伴う発疹(じんましん)が出ることもある。

【重度】ヒアリに刺されてから数分から数十分のうちに、アナフィラキシーショック症状(激しい動悸、息苦しさ、声がれ、めまい、頭痛、吐き気)が出ることもあるとされるが、ショック症状の有無や、それがあらわれるまでの時間は個人差が大きい。刺されたことによる血圧低下で気を失うこともあるため、ショック症状の有無に関わらずしばらくの間は刺された人を一人にせず周囲の人が様子を見ている状況にした方が良い。



写真提供: 辻和希

働きアリを刺激するとすぐに刺してくる



刺された箇所は1~2日後に水疱ができる

4.5.2 ヒアリに刺された場合の対処法

①ヒアリに刺されたら、まずは落ち着いて様子を観察する(20~30分周囲に人がいる状況で)。

②ショック症状などのアレルギー反応が出たら、すぐに医療機関にかかる。その際に「アリに刺されたこと」「アナフィラキシーの可能性があること」を伝え、すぐに治療してもらおうようにすること。

※アナフィラキシーの補助治療剤であるアドレナリン注射液を持っている場合は、注射する。

③アレルギー反応が出なければ、患部を冷やすなどして経過観察。

※台湾の事例では刺されてから1時間以上経過後にショック症状を起こして倒れた例もあるため、1日は経過観察をしておいた方が良い。

4.5.3 注意点

ハチに刺された場合と異なり、ヒアリに刺された場合は、初めて刺された場合でもショック症状が出る場合もあるため、注意が必要。